



ピティナ・ワールドフェスティバル  
21世紀のピアノ教育について考える5日間  
2002年3月27日～3月31日

# 追悼演奏会 福田靖子を偲ぶ ～ピティナと歩んだ35年間の映像とともに～

3月29日 東京芸術劇場大ホール

河原 亨

写真提供：社団法人全日本ピアノ指導者協会

ピティナ(社団法人全日本ピアノ指導者協会)の創立者・福田靖子前専務理事は、昨年(2001年)の11月10日に逝去されたが、その35年間はひたすら日本のピアノ指導者のレベル向上をめざし、ピアノ教育の普及に努めた日々だった。「教育は高きに流れる」の信念に基づき、その時々の課題に果敢に挑戦。1977年に第1回を開催したピティナ・ピアノコンペティションは、2001年には25回を数え、その参加者数2万人以上という世界最大規模のピアノコンクールにまで育てあげた。この人の理想、情熱、行動力はたいへんパワフルで、説得力に満ちたもの。そうしたユニークなキャラクターが多くの子供やピアノ教育者をひき付け、動かしてきた。

その福田靖子氏の「追悼演奏会」が、このほど開催された「ピティナ・ワールドフェスティバル」第3日目の午後7時から東京芸術劇場で行われた。第1部は「ピアノ演奏と追悼の辞」で、この日は当協会の会長・羽田孜氏(衆議院議員)はじめ中山靖子氏(協会副会長)、播本三恵子氏(協会理事)ほかによ

って、追悼の辞が述べられた。また、国際シンポジウム「ピアノ教育の未来」に海外から参加していた教育者を代表して、ポール・ボライ氏(ジーナ・バックアウアー国際コンクール創立者)が熱い弔辞を述べた。その間に3つのピアノ演奏(本多昌子&真子の連弾、近藤麻里、泉ゆりの)が行われ、モーツァルトの《ロンド・イ短調》やシューベルトの《セレナーデ》などが静かに会場に流れた。第2部は故人の遺志により、モーツァルトの《レクイエム》が吉田裕史指揮の東京交響楽団メンバーによって感動的に演奏された。

各地のピアノ指導者の組織化、社団法人化をはじめ、コンクール、セミナーの開催、そして新たに生涯学習へと、その活動の輪を広げていくピティナ。このピティナを全国に129支部、8000人の会員を擁する世界最大規模のピアノ指導者団体につくりあげたのは、まぎれもなく故福田靖子氏の力による。その偉大な業績は故人の遺志とともにあらたな世紀を迎え、さらに未来へと引き継がれようとしている。



吉田裕史指揮、東京交響楽団メンバーによるモーツァルトの《レクイエム》



J.N.ファンメル

# 《ピアノ 300年 グラン・フェスティバル》 開催 日本J.N.ファンメル協会 世界公認記念特別例会 ピアノを読む・ピアノを聴く

3月31日

写真提供：日本J.N.ファンメル協会

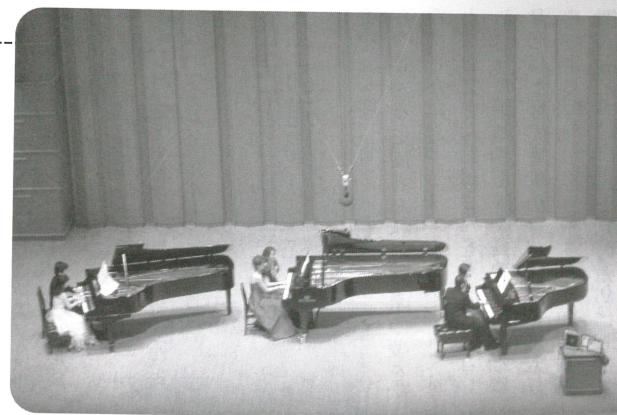
坪田由香

ピアノが誕生して300年。「ピアノ」という楽器が、どれほどまでに味わい深く魅力的なものか?」を存分に堪能できるフェスティバルが3月31日(日)紀尾井ホールで行われた。

「1709年にイタリアでピアノが発明されてから約300年にわたって発展してきた

ピアノ音楽の全容が俯瞰できるように」時代を追いながら、約40曲を7人のピアニスト(岳本恭治、雁部一浩、山季布枝、八木原由夏、藤川順子、小柳信道、間瀬紀子)による2手から12手の演奏と、ウィーン式とイギリス式のメカニックの違いや、作品・作曲家にまつわるエピソードなど、他では聞くことのできない興味深い話を、案内役も務めた日本J.N.ファンメル協会会長、岳本氏が曲間に紹介。特に、初期バロックと徳川幕府のスタートがほぼ同じ時期なので、ピアノ史と徳川全15代の将軍を結び合わせながらの進行というアプローチは斬新で、大変おもしろかった。

第1部は、昨年、世界公認を受けた日本J.N.ファンメル協会の式典に引き続き、世界初のピアノ曲ジュステイニの《ソナタ》、J.S.バッハやスカルラッティなどバロック・ロココ時代の曲を、続いて古典派では、モーツァルトやベートーヴェン、ピアノ製造もしていたというクレメンティの曲以外にも、練習曲でしか馴染みのないチェルニーの《ロンド・アパシオナート》や、モシェレスの《華麗なロンド》など知られざる佳曲を楽しんだ。



ステージには、スタインウェイD274、ベヒシュタインD280、スタインウェイ・ピアノ誕生300年記念限定グランドモデルTP300と3台の名器が勢ぞろい。それぞれ音の響きの違いも楽しんだ

第2部は、いよいよロマン派の時代へ。大ピアニスト、ゴドフスキー編曲によるシューベルト《楽興の時》や、「練習曲の歴史を追ってみましょう」ということで、演奏会のプログラムに載せるなんて珍しい(!)バイエルとブルグミュラーの練習曲があったり、ドラ

イショックの《ファンタジー》など隠れた名曲も紹介するなど、誰もが楽しめる幅広い選曲となっていた。続いて、近・現代ではドビュッシー、ラフマニノフの作品や雁部氏の《ピアノのための幻想曲》作品25などが演奏され、プログラム最後はJ.S.バッハの《主よ人の望みの喜びよ》を12手で。厳粛な空気の中、フェスティバルの幕が降りた。

とにかく、ピアノの魅力を十分に味わうだけでなく、今まで以上にピアノに対する興味が増したのでは?と思える充実したものだった。



ピアノ・案内役  
岳本恭治



作曲・ピアノ  
雁部一浩



ピアノ  
山季布枝



ピアノ  
八木原由夏



ピアノ  
藤川順子



ピアノ  
小柳信道



ピアノ  
間瀬紀子